令和七年一月吉日初版作成

人間神の子への道

高嶋　善三郎

目　次

●真実の自己と現われの自己を区別する・・・・・３
●自分を責めてしまう自分は、業生なのか・・・・３
●業の波動は、実在の波動と対立するものではない・・５
●奇蹟の体験につながる感謝行・・・・・・・・・８
●愛のひびきが、宇宙に溢れ出でる・・・・・・・９
●愛と感謝の心を取り戻せば、本心が現れる・・・９

お　願　い

より分かりやすくするため、ご感想があれば、お聞かせください。
例えば、この点について分かりにくいとか、どの点が心に響いたとか、新しい疑問があるなど、何でも結構ですので、お聞かせください。
次の連絡先にお願い致します。

（スマフォ）０９０３３４６６６１９
（アドレス）zensan@peach.ocn.ne.jp

真実の自己と現われの自己を区別する

業想念を光に還元していく方法について、『人間と真実の生き方』に示されていますが、それを補完して最終的には肉体の人間になっていったときに失った肉体外の六感（直感）直覚（神智）即ち直観力を取り戻す方法」について五井先生は解説されています。

そのためには、まず生命の本源の世界につながっている自分と肉体頭脳知識や頭脳に残っている体験で知る自分の区別が出来る心境を得ることが大切だと言われています。

五井先生著の『老子講義』１４講では、「人を知るは智なり、自ら知る者は明なり。人に勝つ者は力あり。自ら勝つ者は強し。足ることを知る者は富めり。強いて行う者は志有り。（道徳経第３３章）

人を知るのは智でもできるが、想いを静め、心を深めて、じっと、生命の本源の世界にまで入ってゆかないと、真実の自己と、現われの自己との区別をはっきりつけて、真実の自己、大生命の分生命である自分というものを知ることができない。そういう境地になることを明（めい）というのだ。あらゆる業想念波動を超える程の強い意志力は、やはり明といわれる程の心境にならぬと現われぬことなのである。想念を常に物質世界の中に置かずに、神のみ心の中に入れきっている人は、如何なる環境にいても、足ることを知る人であり、心富める者である。何事にも全力を挙げてぶつかってゆける人こそ志有る者として、神は天命を成就させるのである。

真実の自己と現われの自己を知りはじめると、すべての想念行為は正しくなり、他人の言に左右されたり、地位や物質や情愛で動かされたりすることがなくなり、神のみ心のまま、本心そのまま行為ができるようになると言われています。即ち、顕在意識で思ったことが、そのまま現実に現われないのは、潜在意識に存在している、過去に発した神に通じない想念行為によって、本心が動けない状況にあるからであり、本心の存在を認め、それに自分の意識を合わせれば、顕在意識で思った通りの現実が現われると言われているのです。

自分を責めてしまう自分は、業生なのか

『人間と真実の生き方』の中に記述されている自分というものは、業生ですかというご質問がありました。この質問の裏には、自分を赦すことが出来ない、つい自分を責めてしまう。この自分とは、業生ではないかと考えてしまうということでしょう。これに対する答えを整理します。

結論から言いますと、五井先生は「神の分霊であって、業生ではない。その理由として、「この自分は物質界の業生の波を超えている自分、つまり本心の一つの現われということができるから」と言われています。

この理由について、より具体的に解説されています。

この地球界に肉体人間として生活していると、どうしてもこの地球世界の物質波動にあわせていきてゆかねばならない。それ故霊界の分かれの自分であっても、物質世界でのやりとりの過去世からの業の流れが、いつも自分を取り巻いてる。その業は、（自分の肉体身の想いの働きがつくっているのに）あたかも神霊の自分自身がつくったように肉体身の想いのほうからみえるのである。しかし、実際は、神霊の自分のほうは、生命エネルギーを出しているだけで、物質界の業生のほうが、そのエネルギーを力として、業生同志の和合をはかっているのである。

神霊のほうの調和というのは、全く汚れもけがれもない調和であるが、物質界のほうの和合は、お互いの利害打算の妥協によって調和のようにみえているだけなのである。そういう妥協の姿は、神霊のほうに心をおいてみると、不潔な汚れたものであって、責め裁かずにはいられないような、真理にもとるものをもっている。だから、どうしてもそういう他人の姿を責め、自分の心をも責め裁くことになってしまっている。

そこのところが非常に問題で、今日までの宗教のあり方では、責め裁きつつ、真理に近づいていこうとしている。他人を責め裁くことを止めても、自分の心が終始責め裁きつづけてゆく。そういう心の姿勢は、他人を責めまいとしながらも、いつの間にか責めつづけている。だからどうしても、業の波がぐるぐる廻りをして、その人から離れてゆかない。（このような現象になるのは、肉体の心の働きであるが、そのもとは、すべて本心からくるエネルギーであり、このエネルギーはその人の選択と注目に従って意のままに動くことを忘れてしまっているからです。）

そこで、五井先生は、その現象を手放す方法として、次のように示されています。

私（五井先生）は、それ（責め裁く想念）を本心から離してしまうた

めに、消えてゆく姿という言葉を使って、そういう責め裁く想いを、自分を取り巻く業の波のほうに向けたり、他人の業のほうに向けたりせずに、一挙に神霊世界に光明波動の中で消してもらうための世界平和のお祈りをしてゆくのであると言っている。

即ち、自分を赦し、人を赦し、といっても悪業の想念行為を赦すのではない。悪業の想念行為にからまれて、本心を見失った自分（現在意識）に本心本体のほうの自分をあらためて、世界平和の祈りによって、思いおこさせるのであり、悪業の想念行為は、再びあってはならぬものとして、消して去ってしまうのである。（略）

物質界は、微妙な神霊波動の世界からみると、光のまだゆきとどかない部分が非常に多く、闇の中を進んでゆくようなものである。しかし、光明波動である神の子人間がすすんでゆけば、それだけ闇はとけて、光明の世界がひらけてゆくのである。

だから、人間は、うまずたゆまず、神の子であることを信じて、いくら業生の波がふりかかってきても、それはすべて、闇の消えてゆく姿として、突き進んでゆけばよいのであると説明されています。（白光誌１９７７年１２月（６ページ『自分というもの』）」

業の波動は、実在の波動と対立するものではない

『新しい神聖復活の習慣』において、宇宙神と同調するには、肉体人間観という古い習慣を新しい神聖復活の習慣である神の子人間観に基づく想念行為の習慣に変えていくことの大切さを理解したところです。私達の想念自体がどういうものなのかを整理することは、新しい習慣にスムーズに変えてゆく上で大きな力になります。

想念については、資料『愛と感謝の心は、すべてを光でつなぐ』で整理されていますが、それを要約すれば、次の通りになります。

●想念の中には、神様に通じている想いや神と通じない想念行為があり、その前者を本来因果といい、後者を悪業（業想念）という。

●人間の想念意識というものは、表面で思ったことが、そのまま潜在意識となってゆくものであり、逆にまた潜在意識の中から、表面の意識や行動に自然に現われてきたりしてするのである。表面で過去世から今日まで想ったり行動してきた、いわゆるその人の過去の想念行為が、現在の意識とは全く相反する行為となってでてくることが多いのである。そこに人間の不幸が起こってくるのであるから、その潜在意識を、表面の

意識と全く一つの想念に統一しておかないと、自己が現在望んでいる幸福な環境が現われてこないのである。

顕在意識というものは、肉体構造の中にあるものであるが、潜在意識というものは、肉体構造の中から、幽体、霊体という奥の体、つまり四次元五次元という次第に次元の高い階層に蓄積されている。そしてそのずっと奥に神意識というものがあるのである。そして、普通いわれている潜在意識というのは、肉体と幽体にわたって潜んでいる意識なわけである。（『愛すること』１８９ページ）」

●人間が行為としてなしたことはどんな些細な事も、全て自己の幽体に記録すると同時に、この現象世界の幽界にも記録することになっている。

●やったことは輪廻転生してぐるぐる回っているから、行ったものは自分にまた返ってくる。一度いいことをする。そうするとこれがスーッと良いものは波長が合って、十にも二十にもなって返ってくる。悪いことをした場合にそのままにしておけば、十倍二十倍にもなって返ってくる。

●人類の因縁因果の波というのは、ぐるぐる輪のように回転しているのであって、顕在意識から潜在意識に、現れている世界に、又その反対に潜在意識から顕在意識へと、回りつづけているのであり、私共は常にテープレコーダーを持っていて、瞬々刻々自己の想念行為を吹き込み、そして同時に聞いているという形になっている。

●人間の想念は、神の直霊から分霊として働いている本心の周囲を何重にも巡っている波動（ひびき）で、世界人類の個人個人を結び合い、交流し合いお互いに影響を及ぼしあっているものである。

そしてそれと同時に、すべての人類の想念波動は、自分の上に流れて来ている。例えばテレビやラジオの音波や光波は、絶え間なく大気中を流れているが、スイッチを入れダイヤルをそれぞれ合わせなければ、何の音も聞こえず、何の映像も映ってない。しかし、ダイヤルをひねれば、音も聞ければ、映像も映ってくる。それと同じように人間の想念波動も自己の意識、意識といっても表面にでている顕在意識だけでなく、潜在している潜在意識を含めた想念波動の部分の、ダイヤルをひねっていることになる。つまり人類すべての想念波動が、自分の上におおいかぶさって来ている。自分の回しているダイヤルの分だけが、自分の運命となって現われてくる。この真理から考えると、個人の想念行為は、自己にその報いが必ずやってくると同時に、人類全般にもその影響を及ぼしている。どんな小さな想念行為でも、ゆるがせに出来ないのである。

また、人間の想念は波の動きのようになって、この地球を常に経巡っている。人間の想いは、例えどんな細かいことでも、この地球や宇宙を

巡っていっている。そしてその想いと同じような想いを十倍二十倍もお供につれて、再び自分の所へ返ってくる。（『白光誌』１９６４年７月号７ページ）

●想念波動とは、電波や光波や音波よりももっと微妙な、精神宇宙子の波動であり、その渦はそれぞれがエネルギーであり、そのエネルギーは人間の肉体に働きかけて、人間にその想念波動の通りの行為をなさせしめるのである。

その想念波動が争いや妬みの暗い汚れたものであれば、働きかけられた人間はそういう行為をするのであり、愛や善意の光明波動であれば、愛の行為になってくるのである。

これらのことを知ると、『人間と真実の生き方』で示された生き方が、どんなに大切なかを思い知らされます。

大霊（神）はすべての力の根源であって、すべてを一つに結ぶ調和そのものであるのに、その大調和の姿がそこに現われようとして、業想念の壊滅をひき起こしているのに、そうした神の理念の現われの方に想いをむけずに業（カルマ）の方に想いをむけるから、不平不満や、恐怖や恨みが起こる。不平不満の想念の人には不平不満の事柄がかえってき、恨みを持つ人には、恨みの想いがかえってくる、自分が出したものはすべて自分にかえってくる、というのが、業（カルマ）の法則なのである。この業（カルマ）というのは、神がなくて現れたものではなく、間接的にはやはり、神の力によって動かされているのであるから、神がその必要を認めない時には、崩れ去るのである。

神を離れた誤てる想念というのは、本当は神様のひびきを現わすための肉体なのに、その神霊のひびきを忘れてしまって、肉体だけを別に離して考えるから、生命はそこにだんだん枯渇してゆく。生命エネルギーがなくなって来る。やがては滅びるという事になる。それは天変地変で滅びるか、戦争で滅びるか、どちらにしても生命エネルギーがなくなって来るから、枯れてしまうと注意されているのです。

一方、業の波動は、神のみ心のひびきでも、実在の波動でもなく、人類が神のみ心を離れて独り立ちしようとした時から巻き起こされた波動なので、人類が再び神のみ心に入り込んでしまえば、そのまま、いつの間にか消え去ってしまうものなのである。業の波動は、実在の波動と対立するものではないと解説されています。『神は沈黙していない』（５２ページ）

奇蹟の体験につながる感謝行

五井先生は、人間が業想念の世界を乗り越えていく上において、感謝することの大切さを強調されています。

それについて改めてみてみましょう。

感謝というのは、相手と一つになる気持ちであり、それは業と業とが一つになるのではなくて、光と光、本心と本心とが一体になり、愛の姿が現われるのである。つまりそこに神さまが現われ、しかも神さまのみ心の中に昇ってゆくというのが、感謝なのである。そして神に感謝し、全ての物事、事柄に感謝するそういう心は、すでに祈り心と等しいものであると。

私たちは、常に守護霊に力を添えている守護神と、一人の肉体人間に専属しその主運を指導する各正守護霊と、おおむね、正仕事についての指導を受け持つ副守護霊によって守られています。

直感とか、インスピレーションとかいうのは、これら守護霊からくる指導の念であり、普通は自然的行動のようにおこなわれていると言われています。

そして守護霊守護神に感謝することの大切を説かれています。何故守護霊守護神に感謝しなければだめだと思われたかというと、五井先生が神さまと一つになった時に、守護霊守護神の涙ぐましい働きを知ったから。即ち霊の方では眠らないで働き放しなのです。一生懸命業をかぶっては、苦しくなると滝へ行って、神様の世界でもみそぎがあり、やって又来ては守り一生懸命していることが分かったからと言われています。

そして肉体人間の方で守護の神霊への感謝をつづけることによって、どれ程守護の神霊の守りの力を強めるかということは、多くの人々の奇蹟の体験となって、積み重ねられていっているのです。

また、現在では肉体人間の波動が、霊的波動にかなり近づいている一方、無限に微妙な神界の波動が、守護神守護霊と次第に波を粗くして肉体人間の波に合わせて来ており、肉体人間の方から常に守護の神霊への感謝行をつづけていれば、守護の神霊の波動と肉体人間の波動とが、全く一つになり得る状況にあります。

そうしたことが完成された時、その人の本心は全く開発され、神人といわれ聖者といわれる神我一体の人になり得て、神通力を自己のものとする事が出来るようになると言われています。

愛のひびきが、宇宙に溢れ出でる

私たちは、地球感謝行において、周囲の万物とその背後で働かれる神々に、人類を代表して感謝させていただいています。

五井先生は、「あらゆるものに感謝することは、簡単に実行できる愛行、祈りの行である。それは、何故かと言えば、この感謝行によって神のみ心である宇宙法則の波、生命の本源のひびきと一つになり得るからである。

この感謝行を横にひろげてゆくと、人類の大願目達成の人類波動の調整というべき世界人類の平和を祈るという事になる。

神との一体化を求める宗教の道において終始必要なのは、神や、空気水等の自然現象、動植物、人々等あらゆるものに対して、日々瞬々感謝の心を失わぬという事であり、これこそ、神との一体化をなし得る最大の行であり、人類進化の根源の心なのである。

宗教の道を志ざす者は、率先してこの感謝行に生きるべきで、その他のことは全て枝葉末節のこととも言えるのである。

宗教的な深い学問も様々な行もすべて、常にこの感謝の心が自ずと生まれ出でる境地、即ちそこから神のみ心の愛のひびきが、宇宙に溢れ出でる為のものである」と言われています。

愛と感謝の心を取り戻せば、本心が現れる

愛と感謝の心は、神様に通じている想いであり、これを忘れ、肉体がすべてと考えたため、神に通じない業想念が発生し、自分の本心を取り巻く業想念が形成されたのです。この愛と感謝の心を取り戻せば、無限なる智慧と能力を持った本心が現われるのです。愛と感謝を注ぐとは、守護の神霊への感謝の心を常に思い、どのような苦しい立場にあろうと、「大難を小難にしていただいた」や「いい体験をさせていただいた」と感謝し、闇を超えようとしている自分を認め、愛することです。

自分の周りの、花々や木々などは神に通じているため、愛と感謝を注げば、そのまま愛と喜びをもってこたえてくれます。

自分の言葉、想念、行為を通して愛と感謝を現わしていけば、自分の周りは、すべて喜びに満ち、美しい光によって輝き出します。

「私を見た者は、即ち神を見たのである。私は光り輝き、人類に、いと高き神の無限なる愛を放ち続けている」自分に気付くことでしょう。